

## 英国におけるフットボールの歴史に関する研究(2) : フットボールに関する最初の記録について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦, 修司 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/20228">http://hdl.handle.net/2297/20228</a>

# 英国におけるフットボールの歴史に関する研究 (2)

## ～フットボールに関する最初の記録について～

秦 修 司

### A Study on History of Football in Britain(II)

—Earliest Records of Football—

Shuji HATA

#### 目 的

マグーン (F. P. Magoun, JR) は自著の *History of Football from the Beginning to 1871* (Kölner Anglistische Arbeiten, 1938) の第一章, *From the earliest records to the end of the middle Ages (to 1500)* (1頁-18頁) において、又、マーブルズ (Marples) は自著の *A History of Football* (London, Secker & Warburg, 1954) の第二章, *Earliest Records* (19頁-23頁) において、英国におけるフットボールについての最初の記録について究明している。

民衆のスポーツの娯楽に関する記録はノルマン征服 (1066年) 以前のイングランドからのものは極めて乏しい<sup>1)</sup>。さいころ (dicing)、鷹狩り (hawking)、そして狩猟 (hunting) が気に入りの娯楽であり、征服前のイングランドの人々がある類の球技 (ball-play) を知っていたことは9世紀のネンニネス (Nemnius) 著、*Historia Brittonum* の中のマーリン (Merlin) の物語から明らかである<sup>2)</sup>。5世紀のケルト族のケント王 (King Kent) (実在の人物か架空の人物かは不詳) であるヴォルティゲルン (Vortigern) は国中に使者を遣わして父親のない少年を捜し求

めた。使者は球技 (pilae ludus) をめぐって口論を始めた若者たちの中に、ついに、捜し求める少年を見つけた。このゲームについてはあいにく、何の説明もなく、それがフットボールであると先験的に決めることはできない。事実、ローマ占領以前 (A. D. 43年以前) のケルト族の間にはフットボールに関する証拠はないし、判明している限り、ローマ人はフットボールを行わなかった<sup>3)</sup>ので、ケルト族がフットボールを征服者であるローマ人から学んだと推定することはできない。つまり、ヴォルティゲルンの使者が、マーリンがフットボールをしているのを見たとか、*Historia Brittonum* のこの部分の著者が自分を言及しているゲームをフットボールと理解していたとか決めるだけの確実な証拠はない。

イングランドでは1314年ごろまではフットボールについての記録はない。しかし、1175年から1341年までには球技 (ball-game) についての言及は数多くあり、それ自体としても興味深い<sup>4)</sup>が、又、それがフットボールの言及と解釈すべき余地が充分あるために、この場合、特に興味深いものである。

そこで本研究は、マーブルズ著の *A History of Football* の第二章, *Earliest Records* を取りあげ、彼の *A History of Football* とマグーン

著の *History of Football from the Beginning to 1871* を主たる参考文献として、英国におけるフットボールの最初の記録について明らかにしようとする。

## 本 論

英国におけるフットボールについての最初の記録はトマス・ア・ベケット (Thomas á Becket) 伝の一部として1175年に書かれ、そして又、ジョン・ストウ (John Stow) による *Survey of London* (1596) の中で引用されているウィリアム・フィッツステフェン (William Fitzstephen) の *Descriptio Nobilissimae Civitalis Londinae*<sup>4)</sup> の中の告解期 (Shrovetide) の祭礼についての説明で始めると一般的に言われている。この書はロンドンについて、とくに現在までフットボールと同一視されてきた球戯 (a game of ball) を含め、ロンドン市民の娯楽事について記述していると言われる。その中では、告解火曜日 (Shrove Tuesday) の朝がどれ程、闘鶏 (cock-fighting) や他の少年らしいスポーツに費やされているかが記述されており、告解期の祭礼の特別な言及のあるフットボールに係ると思われる一節は次のようになっている。

Post prandium, exit in Campos omnis iuventus urbis ad pilae celebrem.

Siugulorum studiorum scholares suam habent pilam; singulorum officiorum urbis exercitores suam singuli pilam in manibus. Maiores natu, patres, et divites urbis, in equis, spectatum veniunt certamina iuniorum, et medo suo iuvenantur cum iuvenibus; et excitari videtur in eis motus caloris naturalis, contemplatione tanti motus et participatione gaudiorum adolescentiae liberioris.<sup>5)</sup>

マーブルズは上のラテン語を次のように英訳している。

after dinner all the youth of the city proceed to a level piece of ground just outside the city (probably Smithfield) for the famous game of ball (ad ludem pilae celebrem).

The students of every different branch of study have their own ball; and those who practise the different trades of the city have theirs too. The older men, the fathers and the men of property, came on horseback to watch the contests of their juniors, and in their own way share the sport of the young men; and these elders seem to have aroused in them a natural excitement, at seeing so much vigorous exercise and participating in the pleasures of unrestrained youth.<sup>6)</sup>

(昼食のあと、市のすべての若者は有名な球戯 (ad ludem pilae celebrem) をするために野外 (多分にスミスフィールド) へと出掛ける。それぞれ異った研究分野の学生たちがボールを持っている。市の様々な商いに携わる人々も又、ボールを持っている。年長者、父親、そして金持ちが若者の試合を見るために馬に股がってきて、彼等なりに若者の遊戯に参加する。そして、このような激しい活動を見物し、あふれるばかりの若者の満足に参加することでこれら年長者の胸中には持前の興奮が喚起するようである。)

ストウの時代から、この一節について多くの論議がなされてきたとマーブルズは言っている。というのはそのラテン語の意味するところが必ずしも明確ではなかったからである。例えば、マーブルズが述べているように、the students of every different branch of study (それぞれ異った研究分野の学生たち) と訳した

singulorum studiorum scholares は実際にはどういうことを意味するのか。又, those who practise the different trades of the city (市の様々な商いに携わる人々)と訳した singulorum officiorum urbis exercitores とはどのような人々であったか。しかし, それとフットボールのゲームを行っているとするのに主たる困難さはフィッツステフェンは明確にフットボールについて記述していないことである。フィッツステフェンが極めてよく知っていたので, それについて記述していない ludus pilae ceber (famous game of ball) とは何であったか。それをホッケーであると示唆する者もあった。——ストウはまったく根拠のない baston つまり bat (バット)の語を翻訳に加えたりさえしている<sup>7)</sup>。しかし, このゲームについての記録が2, 3世紀あとの14, 15世紀になってより明確になるにつれてこのゲームがフットボールと共通して有していた多くの点が明らかになってくる。第一は, そのゲームと1533年から有名になった告解期のフットボール試合との関連である。告解火曜日のフットボールの記録は, 事実, 知られている限りで一番古い言及は1533年のヘンリー・ジー (Henry Gee) の最初の市長在任中のチェスター (Chester) のもので, これについてダニエル・キング (Daniel King) (?-1664年) は次のように書いている。

The offering of Ball and foot-Balls were put down, and the silver bell offered to the Maior on Shrovetuesday.<sup>8)</sup>

(告解火曜日に市長にボールやフットボールを献呈することは廃止され, 銀の鈴が献呈された。)

そのゲームが告解火曜日に行われ, 告解火曜日独特の娯楽として闘鶏と一緒に記述されているという事実は, 後世についてのフットボールの知識と照らし合わせてみて, 言及されたゲームはフットボールであることを強く示唆するものである。告解期は何世紀もの間, 伝統的にフッ

トボールのシーズンであり, 闘鶏は告解期の祝賀においてフットボールと極めて関連を持っている。その他に告解期のフットボールについて言及するものは, 16世紀以前にはまったくないのは事実であるが, 祭礼としての告解期の祝賀は海外から導入されたノルマン時代に溯ることは確かなようである。フットボールが後世での告解期のゲームであるとすれば, 祭礼としての告解期の祝賀が導入されたノルマン時代も又, フットボールが告解期のゲームであったとも言えるかもしれない。第二に, フィッツステフェンが言及しているゲームは学生のグループや様々な商売を行っている者(多分に徒弟たち)によって行われているのは確かである。ここではラテン語の正確に意味するところは明らかでないが, その状況は, 徒弟, 生徒そして他の人々がフットボールをするために, 告解火曜日を休日にするように要求した後世の慣習を連想させるものであるのは確かである。フィッツステフェンが言及しているゲームは, この後世でのフットボールの場合でも極めてよくあったように, それを観て賞賛している年長者たちによって観戦されている。そのゲームがスミスフィールド (Smithfield) として明らかにされている市のはずれの空地で行われている事実についても同じことが言えるかもしれない。というのは, スミスフィールドは, もっと後になっての時代での人気のあるフットボール競技場の1つであったからである。

以上述べたことから, フィッツステフェンが実際にフットボールについて記述していると考えられる十分な根拠があると考えられるが, 仮にそうであるとすれば, この一節はいくつかの理由で独特のものであり, 極めて重要である。そのことは, ノルマン時代にすでにフットボールが普及しており, 確立されたスポーツであったことを示すばかりでなく, フットボールと告解期との関係を他の如何なる記録よりもはるか以前の年代まで溯らせるのである。何故ならば, 16世紀以前には, 告解期のフットボールについ

他に言及するものがまったくないからである。

フットボールのゲームが12世紀に行われていたとすれば、13世紀にもそれが行われていたと看做すのは当然である。しかし、13世紀にフットボールが行われていたことを証明するものがまったくなく、それに、フットボールが行われていたかもしれないことを示唆するものさえ、ほとんどない。そのことが、フィッツステフェンが記述しているゲームがフットボールであることの反論として用いられるのである。13世紀にはその確率の程度がそれぞれ変わるのであるが、フットボールについて言及していると看做されるかもしれない背景が3つある。そのうちの1つは、明確にフットボールについて記述しているが、唯一疑わしいのは、それが13世紀に属するものであるかである。それらがフットボールについての言及であるとする困難さは、‘football’の語が英語でその姿を現わさなかった事実による。フットボールが英語の‘football’の語で最初に用いられた記録は1486年に溯る。ジュリアーナ・バーナーズ（Juliana Berners）はThe Boke of Saint Albarns（1486）に添えた紋章学に関する論文、The Blasoning of Armsの中の小円形紋に関する一節でフットボールの比喻を用いている。

Off ballis in arms here now it shall be shewyt.

Nevertheles, ye most consydyr a differans in theys blasynghys of theys armys afore and theys that cum after, wen ye blase them in Latyn tong. For other while thys terme pila in Latyn is take for to be a peese of tymbre to be put under the pelor of a bryge or to syche a like werke as in th'exempull afor. And odyr while this terme pila is take for a certain rounde instrument to play with, the wich instrument servys other while to the hande and then is calde in Latyn pila

manualis as here. And other while it is an instrument for the foote and then it is calde in Latyn pila pedalis a 'fotebal'.

Therefore it is shall be sayd of hym that beris thes armys, in Latyn ; 'portat tres pilas argenteas in campo rubro'; et gallice sic; 'il port de gowelez trois pelettit d'argent'; et angllice sic; 'he berith gowles iii ballis of silver.'<sup>9)</sup>

〔さて、ここで紋章学の小円形紋に関してそのことを示そう。〕

しかしながら、紋章をラテン語で記述する場合には、前に論じた紋章記述とこれから論ずる紋章記述の差異を考えに入れなければならない。というのはラテン語の pila は時には前の場合のように、橋やこれに類する建造物の脚の下に置く木材を意味するものと見られる。また時には、この語 pila は遊ぶために用いるある丸い用具と見られるからである。この用具は時には手で扱うもので、従ってラテン語で pila manualis（ハンドボール）と呼ばれる。それは時には足で扱う用具で、従ってラテン語で pila pedalis（フットボール）と呼ばれる。故にこの紋章を帯びる人はラテン語では portat tres pilas argenteas in campo rubro とフランス語では il porte de queules á trois tour taux d'argent と、そして英語では he bears gules three roundels silver（赤地に三個の銀色の小円形紋を帯びている）と言われる。〕

そして、ball play, playing at ball などの表現はネンニウスを考察した際に明らかなように必ずと言ってよい程、曖昧である。例えば、尼僧の指導の手引書である Ancrene Wisse（1250年頃）の中でのように、尼僧がやりたいとかられる誘惑物の中に含まれている ball play (bal-pleuwe) の場合のように、それがフットボール以外のゲームを示していることが時々あるの

は確かである<sup>10)</sup>。

13世紀のものであると考えられるフットボールについての言及が3つある。そのうちの2つは文学上のものであり、それはラヤモン (Layamon) 作の Brut (1200年ごろ) と作者不明のキャロル (喜びの歌) である。もう1つは1280年にノーサンバーランド (Northumberland) のアッフアム (Ulgham) で発生した死亡事故についての記述である。ラヤモンは Brut においてアーサー王 (King Arthur) の二度目の戴冠式の祝賀での娯楽の中に ball play を紹介している。そして招待客たちがどのようにして drove ball (driven balles) far over the fields (野原のはるか遠くまでボールを押し進めた) か記述している<sup>11)</sup>。その節は、もっと後世になってのクロス・カンントリー (cross country) のゲームを思い浮かばせるものであるが、それは同等にハーリング (hurling) 又は、その 'drove' の語が示唆しているかもしれないようにバットやスティックを必要とする他のゲームを示すかもしれないが、フットボールを示すのかもしれない。作者不明のキャロル, The Bitter Withy では、次のように語っている。

Our Saviour asked leave of His Mother,  
Marry,

If he might go play at ball<sup>12)</sup>

(我が、救世主は、母、メアリーに許しをこ  
うた。

ボール遊びに行ってもよいかと。)

このキャロルの本来の作者はフットボールのことを考えていたか。彼がフットボールのことを考えていたと推量したくなるが、その確証はまったくない。

最後に、1280年の三位一体の祝日 (Trinity Sunday) にアッフアム (ノーサンバーランド) においてゲーム中に死亡事故があったという記録がある。

Henry, son of William de Ellington, while  
playing at ball (ludens ad pilum) at

Ulkham on Trinity Sunday with David le  
Keu and many others ran against David  
and received an accidental wound from  
David's knife of which he died on the  
following Friday. They were both run-  
ning to the ball, and ran against each  
other, and the knife hanging from  
David's belt stuck out so that the point  
though in the sheath struck against  
Henry's belly, and the handle against  
David's belly. Henry was wounded  
right through the sheath and died by  
misadventure.<sup>13)</sup>

(ウィリアム・ド・エリントンの息子、ヘンリーは三位一体の祝日にアッフアムでデイヴィッド・ル・キューその他多数の者と球戯 (playing at ball) をしていたところ、デイヴィッドとぶつかり、デイヴィッドのナイフで思わざる傷を負い、そのために次の金曜日に死亡した。二人ともボールに向って突進してぶつかったのだが、デイヴィッドのベルトに吊るしていたナイフが突き出ていたために先端はさやに納まっていたものの、ヘンリーの腹に当り、握りはデイヴィッドの腹に当たった。ヘンリーはさやによって負傷し、不測の事故によって死亡した。)

ここで、その犠牲者であるヘンリーは ludens ad pilam (playing at ball), つまり、球戯をしていたとしかただ単に記述されていないが、そのゲームはほとんど確実にフットボールであると言ってよいかもしれない。というのは、なる程、フットボールをしていたと記述されていないが、明らかに激しいゲームであり、多くの者が参加したものであり、ロンドンやノフォークにおいてフットボールの記録が残されるようになった時代とさ程かけ離れていないからである。

もう一方では、有名なバラッドである Sir

Hugh of Lincoln or the Jew's Daughter (Child, No. 155)では、その物語の要素としてはっきりとフットボールを取り入れている。

- 1 Four and twenty bonny boys  
Were playing at ba,  
And by it came him sweet Sir Hugh,  
And he played aer them a'.  
2 He kieked the ba with his right foot,  
And catchd it wi his knee,  
And throuch-and thro the Jew's window  
He gard the bonny ba flee.<sup>14)</sup>

- (1 24人の元気な少年が、  
ボールで遊んでいた、  
そこへ愛しのサー・ヒューが通りかかって、  
少年たち皆と遊んだ。  
2 彼は右足でボールを蹴り、  
そして膝でボールを受けた、  
すると見事なボールは  
ユダヤ人の家の窓に飛び込んだ。<sup>15)</sup>)

この詩はフットボールのゲームで始まるが、ゲームの最中、サー・ヒューはボールを蹴ってユダヤ人の窓をつき破り、そのことから他の事件が発生する。この場合での不確かさはゲームについてでなく、その詩が作られた年代についてである。そのバラッドのプリミティブな形態において13世紀のものであると考えられており、そのフットボールの出来事はよりずっと以前のバージョンの中の1つに属すると信ずる理由がある。その仮説を受入れることができれば、13世紀の街頭フットボール (street football) の状況を得ることになるが、それは仮説の域を出ない。

フットボールについて言及していると考えられるこれら4つ以外は、13世紀にはフットボールについて言及しているものはない。スール (soule) に似たゲームはそれについての数多くの14世紀の言及から判断すると13世紀に広範に行われていたに違いないのは確かであるが、フランスからの記録もほとんどない。しかし、スー

ルが13世紀に存在したという興味深い証拠が、地獄の悪魔たちがユダ (Judas) の魂でフットボールを行っていると言われている奇跡劇において見られる<sup>16)</sup>。

記録の中に13世紀のフットボールについての言及がない理由があるかもしれないが、その状況をより詳しく考えてみる価値がある。14世紀からフットボールについて出された告示の数が比較的に多くなるのであるが、それらのほとんどを2つのうちの1つの方法で分類することができる。それらは文学上の言及であるか（というのは、フットボールを比喩に用いることが1350年ごろから流行しだしたからである）、あるいは、フットボールのゲームが若者の心を弓術から奪ったため、フットボールが公的不法妨害又は、国家を危くするものと看做されるようになったゲームの公式な禁止の形をとっている。このような状況はどちらも13世紀には生じなかった。13世紀のフットボールについての言及は数に乏しく、ほとんど比喩的描写が用いられていない。詩は単純で直接的であり、それに関係する事実又は出来事だけに局限されている。これらの詩にフットボールがまったく取り入れられてなければ、その場合、詩の作者はフットボールを充分知ってはいるけれども、それについて述べていないのであろう。けれどもチョーサー (Geoffrey Chaucer) (1340? - 1400) は100年後、フットボールを含めて日々の生活の事象から比喩的描写を引出している。チョーサーは、Knight's Taleのパラモン (Palamon) とアルシーテ (Arcite) との支持者たちとの闘いが行われている個所で次のように述べている。

Ther stomblen steeds stronge, and down  
gooth al;

He rolleth under foot as dooth a ball.<sup>17)</sup>

(駿馬はどう像れ、騎乗の武者は皆落馬する；

ある者は足に踏まれてボールのようになる。<sup>18)</sup>)

これがフットボールの比喩であるのは明らかであり、1699年にチャーサーを次のように意訳したドライデン (Dryden) もそう感じている。

Down goes at once the horseman and the horse;

That courser stumbles on the fallen steed  
And flound'ring throws the vider oe'r his head.

One rolls along, a football to his foes  
.....<sup>19)</sup>

(たちまちに人馬諸共どうと倒れる。馬は倒れた馬につまずいて

もがく拍子に騎乗の武者を頭から投げ出す。

ある者はさながらフットボールの如く敵の方へところがついていく<sup>20)</sup>。)

又、チャーサーと同時代の中西部 (West-Midland) の人がロマンス、*Sir Gawain and the Green Knight* の中で不明の作者はガウェイン卿が刎ねた緑の騎士の首に対してアーサー王 (King Arthur) の宮廷の面々がした仕打を描くのに紛れもなく彼も又、フットボールを念頭に置いていたことを示すような表現をもってしている。

And many kicked it (the head) with their feet as it rolled away<sup>21)</sup>

[そして、大勢の者が、それ (首) を蹴ってころがした。]

話は戻るが、何故、13世紀にはフットボールの禁止がまったくなかったのかを知るのは容易である。弓術 (Archery) が非常に重要視されていたので、その結果、フットボールだけでなく他の数多くのスポーツや娯楽が禁止されたのは100年戦争 (Hundred Year War) (1338—1453) であった。この問題で、そのようにフットボールや他のスポーツや娯楽を禁止するという強い行動をとる必要性は一世紀前の13世紀には生じなかった。ロンドンにおいてはフットボールが

まだ不法妨害に感じられなかった事情もあるかもしれない。つまり、後世になっての市よりも空地が多くあり、狭い路地が少なかったのでフットボールを行う者たちが小売商や家主を困らせたりすることがなく、官憲を激怒させてフットボールを弾圧する機会がなかったからであろう。これら諸々の点をすべて考えてみると13世紀におけるフットボールがあまりよく記録されていないことはあまり驚くべきことではないかもしれない。しかし、13世紀にフットボールが存在していたこと、そしてロンドンや他の町の大通りにおいて行われていたこと、あるいは郊外でも行われていたこと、そしてフットボールの発祥の地がどこであるにせよ、フットボールはすでにイングランドの北部へ浸透していたことはかなり確実視してよいだろう。

## ま と め

本研究ではマーブルズ著の *A History of Football* の第二章 *Earliest Records* を取りあげ、主としてマーブルズの見解に基づき、英国におけるフットボールについて言及したものの最初の記録について明らかにした。マーブルズは *Earliest Records* の中で、特に12、13世紀におけるフットボールの記録について考察している。彼はトマス・P・ベケット伝の一部として1175年に書かれた *Descriptio Nobilissimae Civitalis Londonae* の中でフィッツステフェンによって言及されたゲームがフットボールであることを強く示唆するものとしてしている。その根拠として、第一に、フィッツステフェンが言及しているゲームは1533年から有名になった告解期のフットボール試合と極めて関連があること、第二に、そのゲームは学生のグループと様々な商売をやっている者によって行われたのは確実であること、を挙げている。

## 注及び引用・参考文献

- 1) W. Pfändler, *Die Vergnügungen der Augelsachsen, Anglia*, XXIX (1906), 417-526; quoted in Magoun, *History of Football from the beginning to 1871, Kölner Anglistische Arbeiten*, 1938, p. 1.
- 2) Nemnius, *Historia Brittonum*, cap. 41. ed. Th. Mommsen, *Monumenta Germanie Historica, Auctores Antiquissimi*, XIII (Berlin, 1898), pp. 182-183; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 1.
- 3) 時々、問題にされてきた古典的なゲームはローマ人のハルパスツーム (*harpastum*) とフォリス (*follis*) である。ハルパスツームは小さく堅いボールを用いて行われ、ボールは投げられたが決して蹴られることはなかった。フォリスは、普通、羽毛で詰められた柔いボールで行われ、アメリカ大陸原住民のゲームであるラクロス (*lacrosse*) に似ていたと思われる。
- 4) C. L. Kingsford ed., *A Survey of London by John Stow* (Oxford, 1908), II, 219-29; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 3.
- 5) *Ibid.*, p. 226; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 3.
- 6) Marples, *A History of Football*, London, Secker & Warburg, 1954, p. 19.
- 7) Magoun, *op. cit.*, p. 3.; 彼の *Survey of London* (1598) においてフィッツステフェンの *Descriptio Nobilissimae Civitalis Londinae* をかなり引用したストウは *singulorum studiorum scholares saum habent pilam* の句を *the schollers of every schoole have their ball, or baston* (Kingsford, ed. *cit.*, I, 92) と英訳している。bat を加えたのはストウのものであり、それは、ストウはいずれにせよフィッツステフェンによって言及されたゲームをクラブボール (*club-ball*) か又はホッケーの類のゲームと考えたことを意味している。事実、ストウは *Survey of London* においていずれの個所においてもフットボールについて言及していない。けれどもキングスフォードはこのやり方で明らかに2つの節を用いた (*op. cit.*, II, 470, under 'football')。ストウの初期の編集者であるトーマス (W. J. Thomas) (London, 1842) は214ページにおいて 'ad lasum pilae celebrem' を 'at the well-known game of foot-ball' と英訳しており、そして、フィッツステフェンの一節を 'football' と解釈していると見られるかもしれないのはブランド (J. Brand) の *Observation on Popular Antiquities* (ed. H. Ellis, London, 1841), I, 45, note 9; Fr. Knudsen の *Danske Studier* (1906), p. 86, and note; G. P. Blaschke の *G. A. E. Borgen's Geschichte des Sports aller Völker und Zeiten* (Leipzig, 1926), I, 34における *Geschichte der Ballund Laufspiel*; そして K. Wildhagen の *Angl. Beiblatt* 45 (1934), 379によって採られてきた。
- 8) *The Vale-Royall of England* (London, 1656), p. 194; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 102.
- 9) William Blades ed., *The Boke of Saint Albans by Dame Juliana Berners* (London, 1881), sig. E. 5-6; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 15.
- 10) Ed. James Morton (Camden Soc. Publ. No. 57. London, 1853), p. 218, l. 8; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 4.
- 11) Ed. Sir F. Madden (London, 1847), II, 616, vv. 24703-04; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 4.
- 12) Edith Rickert ed., *Ancient English Christmas Carols, in the New Medieval Library*, London, 1910, pp. 86-87; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 12.
- 13) *Calendar of Inquisitions, Miscellaneous* (Chancery) (London, 1916), I, 599, item 2241; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 5.
- 14) F. J. Child ed., *The English and Scottish Popular Ballads* (Boston, 1888), pt. 5, p. 243, version A.; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 12.
- 15) F. P. マグーン, Jr 著, 忍足欣四郎訳, フットボールの社会史, 岩波新書, 1985, 16頁の訳を用いた。
- 16) quoted by J. J. Jusserrand, *Les Sports et jeux d'exercice dans l'ancienne France* 2nd. ed., Paris, 1901).
- 17) F. N. Robinson ed., *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* (Boston, U. S. A, 1933), p. 50; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 8.
- 18) F. P. マグーン, Jr 著, 忍足欣四郎訳, 上掲書, 10頁の訳を用いた。
- 19) Palamon and Arcite; or the Knight's Tale, BK. iii, v. 611.; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 9.
- 20) F. P. マグーン著, 忍足欣四郎訳, 上掲書, 11頁の訳を用いた。
- 21) J. R. R. Tolkien—E. V. Gordon ed., Oxford 1936, v. 428; quoted in Magoun, *op. cit.*, p. 9.